

# 生徒集団の形成と諸実践

—女子高のエスノグラフィ—

竹石聖子

## 1、はじめに一問題設定と方法

学級崩壊という言葉に象徴されるように、今日、学校という場、あるいは学級が成り立ちにくい状況が生まれている。より具体的には、授業が成り立たない、行事が行われぬ、教師—生徒関係が成り立たないという現象である。また、生徒間関係も困難な状況にある。

既存の学校が成立しないという状況を変え、さまざまな改革が政策レベル、あるいは個々の実践においても模索され試みられているが、多くの学校や教師は混乱した状況にあるようだ。このような中で新しい学校像が模索されることはもちろんのこと、どうしたら、学校、学び、教師—生徒間関係、あるいは生徒間関係が成立するのかなど、具体的な展望が必要とされている。

そこで「総合」という独自の実践を行っているT女子高に着目し、1997年度には3年生を、1998年度には1年生を対象としたエスノグラフィカルな調査を行った<sup>1)</sup>。3年生の調査はT女子高に独自の学校生活がどのようにして展開されているのかを明らかにするために、週に一度、クラスの生徒と一緒に「総合」の時間に参加し、夏にインタビューを行った。1年生については、彼女らが体験してきた学校とは大きく異なるT女子高にたいし、入学当初どのような戸惑いを持ち、そしてそれがどのように変化していくのかを観察した。その際、「総合」の時間だけではなく、行事への取り組みや教師との関係など学校生活全般にたいしても考察の対象とし、調査は週に一度の「総合」の時間以外にも学校行事やHR活動に参加し、通常の教科授業にも一週間の参与観察を行った。

本稿は2年にわたる調査記録をもとに、一

つ一つの事例を解釈し、若干の整理を行う研究ノートである。特に以下の3点について整理を行う。一つは、T女子高独自の学校文化を明らかにすること、次に入学当初の1年生と3年生との学校での過ごし方の違いについて明らかにすること、最後に、1年生が3年生のように学校生活において主体的にかかわるようになる過程を分析することである。その際、仮説的に、ジーン・レイブらの「正統的周辺参加」<sup>2)</sup>の概念を援用することにする。レイブらは『状況に埋め込まれた学習』において新参者が実践共同体へ正統的周辺参加を通して共同体の成員である古参者になるプロセスを分析している。その中で、特に、新参者が正統的周辺参加をすることで実践共同体の全体が見えてくるということ、学習が教える—教えられる関係で成立しているのではなく、学習の対象物や（親方ではなく）古参者との関係で学習活動が成立していること、それらを通して新参者が正統的周辺参加から十全的参加へと移行していく過程で実践共同体のアイデンティティを獲得していくという点に着目し、T女子高において、学校に対してアイデンティティを持たない1年生が、学校にアイデンティティを持ち主体的に活動をしている3年生のように変化していく過程を明らかにしたい。

## 2、対象校について

T女子高は35人～40人学級が5クラス～6クラスの規模の学校である。本校は生徒会活動や学校行事が活発な学校で、数年前に生徒会の働きかけで私服化が実現している。学習活動においては週に一度「総合」の時間を設けている。「総合」の時間はAの学習（1年生

で「生命・そのつながり」、2年生で「人間という生命・その実現」、3年生で「自律・私の出発」・Bの学習（「感性・表現・造形にかかわるもの」）・Cの学習（農作業・共同食事・福祉実習）の3分野で構成されている。「総合」の日は普通の授業とは異なり午前・昼（共同食事）・午後の3つの時間配分で行われるのも大きな特徴であろう。2時半からはノート書きの時間が設けられており生徒は一日の授業をゆっくりと振り返り、ノートはその日のうちに教師に提出する。担当教師は担任教師集団で構成されている<sup>3)</sup>。

筆者がおこなったインタビューによれば、生徒の多くは特にT女子高を積極的に選んで入学してきているわけではなく、T女子高にアイデンティティを持ち学校の活動に積極的な3年生も入学の志望動機を「ほかに入れるところがなかった」と話すケースが少なくなかった（「総合」という実践に興味を持ってT女子高を選んで入学する生徒もいる）。

### 3、3年生の学校生活

T女子高においては古参者である3年生の学校での生活誌からT女子高がどのような実践共同体を形成しているのかを明らかにすることにしよう。

#### (1) A組のクラス集団

A組は10年目の男性教師が担任をし、全校の中で遅刻者の数が一番多いクラスである。T女子高は2年次でクラス替えを行うが、2年から3年はそのまま持ち上がる。A組は2年次での退学者が多く、3年生は29名のクラスであった。クラス集団には大まかに3つのグループが形成されていた。

#### ●服装および休み時間の過ごし方

グループI：委員会の役員などが比較的多く休み期間は教室にいないことが多い。またそうでない生徒は外や体育館でバスケットボールなどで体を動かして時間を過ごしている。12名のうち2名が「制服」（T女子高は私服であり、この「制服」はルーズソックス・ミニスカート・ブラウスなどを着こなしているものを指す）を着用している。

グループII：休み時間は教室で集団になり

おしゃべりをしていることが多い。9名のうちほとんどが「制服」である。また一人は私服のときもある。おしゃべりの内容は「ナンパされた話」など学校外で遊んだときの話題が多い。

グループIII：一緒に教室のはじめのほうで固まって時間を過ごしているが、宿題や雑誌を読むなど個人で時間を過ごしていることが多い。8名全員が私服を着用している。

#### ●授業への参加の仕方

A B Cの学習の中でグループによって参加の仕方に特徴が顕著なのはCの学習の、特に農作業の時間である。以下はトマトのわき芽摘みの様子である。

【グループI：手馴れた手つきでどんどん芽を摘んでいく。摘み終わると畑の端のちょっとした空間で、泥まみれになりながら大騒ぎをし時間を過ごす。また水撒きなども、積極的に行い、ホースをつかって水遊びをしながら畑に水をやるなどの光景が目立つ。

グループII：Iの生徒と異なり畑を動き回ることなく、土の上に座りおしゃべりをしながら目の前のトマトのわき芽を時間をかけて摘む。芽摘みよりはおしゃべりに集中し、意識の外で手がうごいている様子である。

グループIII：「授業だし、減点されるといやだ」ということが学習の動機であり、積極的に動く姿はみられない。】

彼女らの参加の特徴は休み時間の過ごし方とよく似ている。教師は生徒と一緒におしゃべりを楽しみながら参加しており、授業時間ではあるが、ゆったりとした空間が形成されている。この授業の参加の様子を見ると、3つのグループの中ではグループIの生徒がもっとも積極的といえる。

#### ●「T女っこ」<sup>4)</sup>

「T女っこ」とは、生徒と教師の中で「T女子高の生徒っぽい」ことを意味する言葉である。

委員会活動にもたずさわり授業においても積極的に動くグループIの生徒が学校やクラス集団においては中心的な役割を果たしており、学校の中心的担い手という意味では「T

女っこ」そのものである。例えば、グループⅠに属するアイとグループⅡに属するマキは自らを「T女っこ」と称し、「総合」の時間に学んだことを解説してくれる生徒である。マキはグループⅡに属するが「うちらは間でつなぎ役」と話しており、Ⅰの生徒とも仲がよい。二人はインタビューで次のように「T女っこ」とそうでない生徒の違いを話している。

【筆者がT女子高の「総合」の時間についての話を一通り聞いたあとに、「ほかの人とは違って今日のは分かりやすかった」という感想を述べたあとの会話である。

マキ みんなは表向きな話をするんでしょ？

筆者 じゃあ、これは表向きじゃないわけ？

アイ ほんとだよ。っていうか、わかるよ、違うこという人たち。

マキ ノートとかそうだよ、みんなはこうやってこうで、おもいやりをもてましたって。そういう感想じゃないからね、うちらはね。

筆者 じゅあ、そういう感想いう人は、まだまだ違うの？

アイ なんか、T女子高生じゃない。まだ、入ってない。

マキ 頭でわかっているだけなんだよね、行動には出せないタイプだよ。

筆者 じゃあ、「T女っこ」はどうやって書くの？

マキ だから自分で、わかんないところはわかんないって。

アイ もう、そのまま。だから、私、よくあるもん。今日の授業はよくわかんなかったの、ノートはかけないのでよくわかりませんって。】

彼女らは「総合」の授業を形だけではなく、自分でよく考え、深く学習している人という意味で「T女っこ」という言葉を使用しているのである。しかし、「T女っこ」あるいは「T女子高っばい」という言葉は次のようにほかの意味でもしばしば使用されている。以下は、学校生活全般に対してもっとも消極的（反動的）なグループⅢの生徒へのインタビューである。彼女らはグループⅡに属するノリコに

ついて次のように話している。

【エミ ノリコちゃんは「制服」だからコギャルだよ。でも、おっとりしてるしすっごいきれいだし、はじめコギャルだと思わなかった。

筆者 ノリコちゃんはコギャルなの？

エミ うーん。でも結構、T女子高入っちゃってるよ。

筆者 T女子高入っちゃってるって？

エミ T女子高っばい。

リサ 発言が。キャンプのときにねえ、部屋が一緒だったの。

仲間割れしちゃった子がいたのね。その子としゃべってたときにね、ノリコちゃんの声が出てね、これからはね、どんどん話し合ってるよって、そういうことがあったら話し合わなきゃ、わかんないよ、とか言い出して。普通の学校じゃあ言わないでしょ。】

T女子高は「総合」では共同作業が多く、ふだんの学校生活においても共同作業が非常に多い。また「話し合いが多い」ことをT女子高の特徴として生徒が話すことも多く、行事への取り組みも盛んである。生徒は、学校の特徴である「総合」の学習に積極的に取り組む生徒や授業以外の学校生活の諸場面においても求められる「人の話を聞いて、意見をまとめていく」スキルを身につけている生徒を「T女っこ」という言葉で表していることが分かる。グループⅡのノリコが「T女子高っばい」と評価されていることから、単に授業に積極的なグループⅠの生徒が「T女っこ」であるのではなく、グループを超えて「T女っこ」は存在し、彼女らを中心にクラス集団が形成されているのである。

### ●自律的なクラス集団

先に述べたようにクラス内には大きくは3つのグループが形成されている。各グループはただ仲がよいだけではなく、授業や学校、あるいはクラス集団に対してのスタンスによって形成されていた。ではグループ間の関係はどのようなになっているのであろうか。

グループⅡのマキが「うちらはつなぎ役」と語ることも、グループが異なっているにもかかわらず

交流があることが想像できるが、次の事例にもそれはよく表れている。

【一学期の「総合」まとめの日：学期の最後にまとめが行われる。この日はクラスの前で「総合」ノートの中で自分が一番気に入っているものを読み上げ、クラスの支持を得た代表の生徒が学年全体の場で発表する形式になっている。グループⅡに属すミサトが時間になっても教室に入らずに廊下で他のクラスの生徒と座り込んで話をしていた。それを担任教師が教室に入るように注意するがミサトは無視する。手を引っ張りどうにか教室へいれようとする教師に向かって、反抗的な態度をとる。これを見ていたグループⅠのマミが「ミサト！」と怒鳴るように声をかけるとミサトは素直に教室へ入り、自分の番がまわってくるとノートを発表した。】

このようにグループが異なり休み時間などにも話す機会が少ないように見える生徒同士の間でも互いに働きかけることができる関係が形成されていることがわかる。またここでは教師の働きかけには応じないミサトが仲間の働きかけには応じており、このことから教師ではなく生徒自らがクラス集団を形成しており、その意味で自律的な空間が成立しているといえるだろう。

生徒が自律的にクラス集団を形成していることは次の事例でもみることができる。

【スポーツフェスティバル：スポーツフェスティバルは6月のはじめに行われ、学校の三大行事（スポーツフェスティバル・文化祭・音楽祭）のひとつである。1、2、3年生でクラスを縦割りにしたチーム編成で競う形式をとっており、3年生が応援団長をつとめ盛り上げる。

A組はほぼ全員が参加したが、いくつかの種目に出ることができなかった。教師が行う爪の検査にひっかかってしまったためである。生徒はきれいに伸ばした爪を出場したいがために切り、再度教師のところへ行くがまだ長いという理由で出場できなかった。出場できなかった生徒は主に「制服」を着用しているグループⅠやⅡの生徒であった。彼女らは応援席で出場できな

かった悔しさから泣いてしまい、HR委員のミホ（グループⅠ）がなだめていた。ミホとマミ（グループⅠ）はこのときのことを次のように話している。

（校則についてのインタビューの際にスポーツフェスティバルの話になって）

マミ だから、ちゃんとね、それ統一しないとだめだよ。だから、スポーツフェスティバルでさあ、爪？

筆者 ああ、爪事件あったね。

マミ だから、それも先生の基準が違うから、みんな。だから出れる子と出れない子いたでしょう。こんなのいまさら言っても遅いんだけどさあ。

筆者 爪事件さあ、泣いてた子はさあ。

ミホ うちのクラスいっぱいいたよ、泣いてた子。

筆者 それは出れなくて泣いたの？

二人 うん。

ミホ 切ったのに、ちゃんと切ったのに。

マミ だめ。】

3年生にとっては最後のスポーツフェスティバルであり、クラスのみんで力を合わせて行う種目に出場できないということが生徒たちにとっては悔し涙を流すほど大きな出来事だった。この出来事は、クラスに対する帰属意識が強いことをよく表わしている。また先に示した農作業の時間の中での教師と生徒は農作業を媒介させながら場を共有していたが、ここでの教師と生徒は対立しており、生徒は教師の理不尽さ（教師によって基準が異なっていることや爪を切ったのにもかかわらず出場が停止になったこと）に反発しながら、教師に対して生徒はグループを越えて団結しクラス集団を形成していることが分かる。

## （2）学校を動かす3年生

これまで、A組のクラス集団の授業や行事などの動きから「T女っこ」を中心に自律的な集団が形成されていることを明らかにしてきた。ここでは、教師のインタビューから3年生が学校を動かす主体となっていることを明らかにすることにしよう。

先の「爪事件」においては、教師はルール違反の生徒に対しては徹底的に指導を行って

いるが、基本的には3年生を信頼している。例えばある教師は入学したばかりの1年生と3年生の交流の場であるスポーツフェスティバルについて以下のように話している。

【スポーツフェスティバルで縦の関係ができると、(1年生は)落ち着いてくるのよ。というのは、3年生と教師は信頼関係にあるから1年生がちょっと問題だなあと思えば3年生に「ちょっと、あなたから言ってやってくれない？」っていえるのよ。】

教師が信頼をしている3年生は実際にはどのように学校の諸活動では活躍しているのだろうか。例えば文化祭では各クラスの取り組みを展示・食品・ステージという部門に振り分けるがこの調整は文化祭実行委員を中心に行われる。調整の際には各クラスの代表が面接を受け、クラスの案を説明し、それを実行委員会が審査する。この面接がどのように行われているのかを生徒会担当の教師にインタビューした。ここでは1年B組の代表が面接をしたときの話を聞いている。

【筆者 文化祭の面接っていうのは、あれは先生が面接するんですか。

教師 あれはねえ、生徒もいて、でも僕がする。B組はねえ。縁日なんだけど。一回目は何もできていなくて、クラスで話し合うように、いうてな。二回目は。

筆者 ミチコは三回目のときに行ったんですよね。(ミチコは代表者だったが、学校を休みがちで、ほとんど代理の生徒が面接にでていたが、3回目はミチコが面接を受けた)

教師 そうそう、3回目の時に、B組のこの企画のいいところはなんだったって聞いたんだ。そしたら手作りって。手作りってだけ言うたんや。だから、じゃあ手作りやったら、コピーでお面じゃなくて、せっかく「総合」で粘土やってるんやから(このとき1年生はBの学習で粘土で皿を作っていた)粘土からお面つくるとかせなっていうたんや。それはちょっと大袈裟やった。生徒から、

あとから、先生それはやりすぎて言われた。2、3年生があんときはフォローしたんや。】

面接は教師が中心になって行っているが、2、3年生も教師と対等な立場で場にかかわっている。また教師もフォローしてくれた2、3年生を信頼している様子が伺える。このようにT女子高の3年生は学校を動かす主体となっているのである。そして3年生に対し教師は安心して場を任せていたり、あるいは助けられたりしている関係にある。

以上のことから、仲間の声を聞きながら仲間同士の関係を形成する力がある「T女っこ」を中心に自律的なクラス集団が形成されていること、教師は3年生を信頼し、ある程度「場」を任せ、3年生が学校全体を動かしていることはT女子高の学校文化の特徴であると捉えることができる。

#### 4、1年生の学校生活

ここでは1年生の学校生活に焦点を当てることで、新参者が実践共同体としてのT女子高の学校生活や諸活動にアクセスしていくプロセスを分析することにしよう。

##### (1) 1年B組のクラスの様子

筆者が調査を行った年度の1年生について教師は「T女子高に慣れれば落ち着くと思います」という見通しをもつ一方で、「今年は入学式早々から無断欠席や遅刻が多く、こんなことははじめて」と例年とは少し様子が異なる生徒に戸惑ってのスタートであった。

筆者が調査に入ったB組は学年主任の男性教師が担任で、学年の中では比較的、欠席・遅刻は少なく落ち着いたクラスである。クラスに姿をまったく見せることがなかった生徒が2名、そのうち一人は一学期途中で退学している。朝と帰りのHRには教室にくるが授業が始まると保健室という形での保健室登校の生徒が1名、中学時代は不登校気味であった生徒は8名いる。

##### (2) 3年生と異なるB組のクラス集団

3年生同様にクラス集団内に形成されているグループの特徴を示すと以下ようになる。1年生は2学期になるとグループが再編され

ていったが、ここではまず1学期のグループについて説明することにしよう。

●服装及び休み時間の過ごし方

グループ①:入学当初は大きな集団を作り、教室のなかでは大きな声をだし大騒ぎをするグループである。とにかく「元気がいい」というのが特徴である。服装は「制服」の生徒が3～5名、私服の生徒が3～5名である(必ず「制服」を着用というわけではなく流動的であった)。このグループは10人くらいであり、「制服」の生徒も私服の生徒も、ピアスなどの装飾品を身につけるなどの校則違反をしている。

グループ②:次に元気がよいのがこのグループの生徒である。12人くらいの生徒がここに属する。休み時間は2、3人くらいの人数に分かれておしゃべりをしているが、そのおしゃべりをしている組み合わせは固定していない。すべての生徒が私服を着用しているがそのうち半数が①の生徒同様、校則違反をしている。違反をしていない生徒はHR委員や班長などを引き受けている。

グループ③:7名くらいで教室の端で固まって、漫画や雑誌を読んでいる。教室で大きな声を出すこともない「おとなしい」グループである。「制服」を着用している生徒が3～4名であるが、校則違反をしている生徒はいない。

グループ④:便宜上グループとくくるが、ここに属する生徒はどのグループにも属さない生徒である。2、3名ずつでアニメ漫画の話をしている生徒が6名いて、ほかに4名は一人で教室にいることが多い生徒である。すべての生徒が私服を着用し校則違反もしない。

生徒の話を知っていると、グループ①②の生徒は学校外ではお化粧などをする習慣があるが③④の生徒はお化粧の習慣はないという傾向がある。

●授業への参加の仕方

「総合」の時間は通常のチャイムとは異なる時間配分で行われるため、生徒は自分で時間を見ながら行動することが要求される。3年生は教師の指示がなくても自分で次はどこで何の学習なのかを把握し計画表にそって行動

することができるが、1年生には難しい。また授業への姿勢も受身的でやはり教師の指示がなければ動くことはない。さらに1年生は教師から評価されることに対して非常に敏感であることが以下の事例から分かる。

【朝のHR前に教室へ入るとアミ(グループ③)が筆者に声をかけてくる。

アミ あれ、持ってきた?(黒板を指差して)

筆者 何、あれ、知らないよ(黒板に総合の持ち物が書いてある)

アミ 知らないよねえ

筆者 なんで知らないの?

アミ みんなが解散したあとで先生がきて連絡したんだって

筆者 それじゃあ先生がいけないんじゃないん

アミ そう。それで忘れ物ってつけられたら納得いかないよね

筆者 でも、先生のミスだから大丈夫じゃないの?

アミ でもわかんないじゃん。】

このようにさまざまな場面で教師から評価されるということ、しかも減点評価をされるものという意識を生徒は強く内面化している。「総合」ノートも3年生、とくに「T女っこ」は「分からないときは分からなかったと書く」と話しているのにたいし、1年生は「あんなのうそばっかだよ」と話す生徒が大半である。

●生徒総会における1年生と3年生の意識のギャップ

入学して一週間後には新しい年度になって最初の生徒総会が行われる。上級生は生徒総会の趣旨を説明し議長団の書記の立候補を募りに1年生に呼びかけにくるなど、入学早々に1年生は学校を動かしている上級生の姿を目の当たりにする。

【1学期の生徒総会:生徒総会は学校行事の原案が出るたびに開かれるため月に一度のペースで行われることもある。総会中はPHS・携帯電話の電源を切るという約束になっていた。ところが何度か音がなったために司会の生徒が名乗り出るように全校生徒に訴えたが、誰も名乗り出ることがなく、総会は約束違反者がいたために中止に

なった。総会終了後、1年生が名乗り出た。】

この話をしていた1年生の生徒の多くは名乗り出なかった1年生に同情し、上級生がなぜそんなにムキになるのか理解できない様子であった。ここにはみんなで話し合っただけで学校行事を自分たちの手で成功させたいという上級生と話し合うことや場を大事にするという感覚を理解できないという1年生の意識のギャップを見ることができる。

### ●ギスギスしたクラス集団

3年生のクラス集団はグループがゆるやかに形成されながらも、「T女っこ」を中心にグループを越えた仲間関係が形成されながらクラスとしてのまとまりをもっていたが1年生のクラス集団はどのように形成されているのだろうか。

【6月11日キャンプの練習：キャンプでは朝夕の食事は班ごとで自炊のため、この日の「総合」の日は丸一日グラウンドでカレー作りであった。筆者は外で食事をしながら数名にインタビューを行った。例えばグループ③に属し農作業を黙々としていたミュキは「リエさんとかミカさんとか怖い」とグループ①に属する生徒のことを話す。特にリエとミュキは同じ班の生徒であったにもかかわらず、相手のことを「怖い」と感じるような関係を形成している。】

1年生はグループを超えた関係を形成することが困難な状態にあることが明らかである。またインタビューからはグループ③の生徒はグループ①の生徒を「怖い」と感じていてクラスにおいてなんらかの序列関係が形成されていることが伺える。

【同じ場面のグループ②の生徒へのインタビューによると、クラスが分裂していてギスギスしていてキャンプに行きたくないと話している。またHR委員のミサへの批判が続出していた。その批判の理由は「何もしない」と「クラスみんなが批判しているのに本人が自覚していない」ということであった。】

グループ②の生徒は、このように冷静にクラス状況を把握している。「クラスみんなが批判しているのに本人が自覚していない」

という話から、休み時間などにミサの言動についての話が仲間同士で行われていることが伺える。3年生はこのような事態が生じると「T女っこ」たちが動き、話し合いや働きかけ合いを行い問題を解決していこうとするが、1年生のこの段階においては批判を本人にぶつけたり、クラスの問題として提起する動きは見られない。教師は「総合」の学習や「総合」キャンプ<sup>5)</sup>、その他の学校行事への取り組みを通して生徒を観察し、リーダーになってほしい生徒には班長決めなどの際に「やってみないか」と個別に働きかけを行っている。その際教師は「人の話がきちんときける生徒」をリーダーの条件に挙げている。また養護教諭<sup>6)</sup>はB組のグループ①に属するトモコについて「トモコはT女子高では近年まれにみるいい子」と評価している。「どんなところがですか？」と筆者が尋ねると「ちゃんと人の話が聞けて、聞いたことを理解できて、そのとおりに行動できる」と話しており、「人の話が聞けること」が重視されている。教師は「人の話が聞ける」生徒を「T女っこ」予備軍として試しているといえよう。しかし、この「T女っこ」予備軍はすぐには「T女っこ」として活躍するようにはならない。教師が班長になるよう個別に働きかけても、ほとんどの生徒は拒否している。また先のカレーづくりをしている際のクラスの様子からも分かるように、仲間の声を聞き、仲間に対して批判的な目が育ちつつあっても、実際にそれがぶつかりあうまでには至らないのである。

以上のように1年生のクラス集団は、授業や学校行事に対して受け身的な参加をしていること、グループを横断した人間関係がクラス集団において形成されていないことなど、3年生のそれとは異なっている。また、3年生は「T女っこ」というT女子高にアイデンティティを持つ生徒が存在し、彼女らが中心になってクラス集団を形成していたが1年生は生徒総会の事例からも分かるようにT女子高固有の学校文化（例えば生徒が中心になって話し合いを大事にしながらか学校を動かしていくこと）に対して違和感を抱き、クラス集団においては互いに批判的な思いをいだいてもそれをぶつけあうことをしない。そし

てクラス集団をうごかしているのは「T女っこ」予備軍の生徒ではなくHR委員や班長など公的な役につく生徒であるか、クラス集団内にできた序列関係の上位にいる生徒（例えばグループ③の生徒が怖いと感じているグループ①の生徒たち）である。

### (3) グループの再編

3年生とは対照的な1年生のクラス集団が2学期以降、変化を見せる。生徒へのインタビューをもとにどのような変化があったのかを整理することにしよう。

#### ●グループ③の生徒へのインタビュー（9月24日）

【筆者 だれとだれが仲がいいか、教えてくれるかなあ？

ミュキ 皆、仲がいいよね。

筆者 そうなんだけどね。例えば、自分らはだれといることが多い？

ミュキ ここ（一緒に食事をしているグループ③をさして）

……中略……

筆者 じゃあねえ、ナツコとかは（だれと仲がいいの？）？

ミュキ アヤちゃんとかカオルとか。

筆者 カオルは二回目だね。

ミュキ ここはいろいろ入れ替わるしね。】

ミュキはp.7ではリエやミカのことを「怖い」と話していた生徒である。6月の時点では一緒にいることの多い同じグループの生徒以外のクラスメートに関しては距離をとっていたが、このインタビューでは「皆、仲がいいよね」と話していてクラスのメンバーに対する距離の取り方に変化があったと読み取れる。またカオルの名前が何度か登場しており、グループが流動的であることが分かる。

#### ●ナツコにクラスの仲間関係について聞いた後に続くインタビュー（9月17日）

【筆者 どこが強い？

ナツコ リエさんのところ

筆者 ここが強い？

ナツコ 今、文化祭の代表して頑張ってるから

筆者 あとは？

ナツコ ミカちゃんのところとか

筆者 やっぱりここか

ナツコ ミカちゃん、いい人だから

筆者 皆を巻き込める人？

ナツコ そう。】

ナツコはグループ②のHR委員をしている生徒である。リエとミカはグループ①の生徒である。筆者はクラスの中心的存在が誰だと思いかを聞き出すために、生徒へのインタビューでは「だれが目立つ？」「誰が強い？」と話を切り出すことが多かった。ここでは「どこが強いの？」という筆者の質問に対して、ナツコは「文化祭の代表をしている」ことや「いい人」であるということを理由にリエとミカの名前をあげている。このことからクラスにおいて「力を持つ生徒」というものが、皆をまとめるような存在として理解されていることが分かる。これはp.7でミュキがリエやミカのことを「怖い」と話しているのとは異なっていて、6月の時点でのクラス集団内に形成されていた「序列関係」とは異なった関係が形成されていると読み取れるだろう。

リエは正式には文化祭の代表者ではなく、不登校気味で代表者として動けなかったミチコの代わりとして代表者をつとめていたが、10月くらいから授業をさぼるようになっていく。これに伴いクラスメートがリエに対して「前は話ができたけど、最近できない」と話すようになる。つまりクラス集団が授業や行事などの学校生活（活動）に参加するかしないかという価値を共有しながらクラス集団を形成するようになったといえるだろう。

このように2学期以降のクラスはグループを越えた関係が形成されつつあり、またクラスの中には仲間の声を聞きまとめる力のあるような「T女っこ」に近い存在が現れているという点で3年生のクラス集団の質に近いものになってきているといえる。

### 5、学校の構成員としてのアイデンティティ形成にいたるまで

ここまで見てきたように1年生のクラス集団においても学校生活を経ることでT女子高に固有の学校文化を生徒が内面化しクラス集団を形成していくようになり、しだいに学校



の構成員としてのアイデンティティを獲得していくが、このアイデンティティ獲得は学校の授業や行事などの活動（諸実践）に参加していく過程と深く関係があるのではないだろうか。ここでは授業や行事にどのように参加しているのかをまとめることにしよう。

### (1) 学習活動への参加と構成員としてのアイデンティティ形成

#### ●農作業の事例

農作業の時間に教師とのやりとりを頻繁に行うのはグループ①②の生徒である。このグループの生徒は③④の生徒が教師に敬語を使うのとは対照的に、教師とも友達のように話をし、反抗的な態度を表に出すことができる。その一方で農作業のような屋外での作業は積極的に参加するが、以下の事例にあるように①と②の生徒では参加の仕方や教師との接し方が異なっている。

【農作業・トマトのわき芽摘み：3年生にとっては説明の必要がないこの作業は、1年生にとっては最初は困難である。どれがわき芽であるか見分けがつかないためである。そこで教師は一本一本のトマトの木を前に生徒を集めて一緒に確認をしながら作業を進めていく。農作業を担当している教師はベテランの男性教師と2年目の男性教師であるが、ベテラン教師は「総合」は農作業を担当することが多く、じか足袋姿で畑に登場する。普段は数学教師であるが自己紹介では「農作業の先生です」と自ら名乗り、畑にいと農家の人のようである。以下は、この教師と生徒のやりとりの様子である。

トモコ（グループ①）：どれがわき芽だかが分からない生徒がベテラン教師に「これ？」と聞くとそのたびに「違う」といわれ、しまいには教師が「どうしてこんなことがわからないんだよ」と大きな声を出す。これに対し生徒はあまりにもムキになるのがおかしい様子で何度も「これは？」「じゃあ、これは？」と聞き、教師も生徒もこのやりとり自体がおかしくてしかたがない様子でどんどん芽を摘んでいった。

ミチコ（グループ②）：同じようにミチコがベテラン教師に、「これ？」と聞くと、

「そこはさわっちゃだめ」と大声で怒鳴られる。この教師の対応は先に示した①の生徒に対する対応と同じものであった。しかしこの生徒は「聞いただけなのに、おこることないじゃんか」「そんなに怒るんだったら自分でやれってかんじ」「全部、もいでやりたいよ」と興奮してしまい、怒りがさめるまでにかなりの時間を要した。しばらくして彼女はもう一人の別の教師に聞く。今度は丁寧におだやかな口調で説明があり、彼女は納得した。】

トモコ（グループ①）はムキになる教師の様子が今まで見たことがない意外な教師の姿だったためにおかしくなり、この教師とのやりとりを楽しんでいる。一方、ミチコ（グループ②）は別の教師の説明には耳を傾け納得していたが、ベテラン教師に対しては「そんなに怒るんだったら自分でやれ」と興奮していた。ベテラン教師のムキになった様子を「理不尽に教師に怒鳴られた」と認識したと考えられる。しかしミチコはここでは教師に反発しているが次の事例からは教師がいない場においては、農作業に対して積極的な感覚を持っていることが分かる。この事例は先の事例の直後の場面である。

【ほうれん草の収穫を行い、収穫した籠いっぱいほうれん草をグラウンドの横の水道で洗う作業をしていたときの会話である。会話をしているのはつい数分前にベテラン教師に怒っていたミチコを含むグループ②のお化粧をする習慣がある生徒で、普段はクラス集団には積極的にかかわろうとしない生徒である。

ミチコ なんかさあ、すっごいいける高校生がこんな会話してたらいやだよね（「こんな会話」とは「ほうれん草がきれいだ」「新鮮だ」という意味）

ヤスコ でも、うちら今、バリバリしてたよ。

ミチコ 今日のほうれん草はきれいだっただとか。

ヤスコ うちら、もうはまってんだよね。】

この作業を積極的に行ったのはこの会話を

していたグループ②の生徒で、教師の働きかけにまっさきに名乗り出るグループ①の生徒はおしゃべりをして作業は行わなかった。グループ②の生徒は教師との関係においてではなく、仲間やあるいは農作業という作業を通して教師が生徒に伝えたい事柄でもある「新鮮なほうれん草」を発見していることになる。また「いけてる高校生がこんな会話していたらいやだよ」と話す一方で「でもうちら今、バリバリしてたよね」と、彼女らは一般的な「高校生」と自分たちとを差異化し、「もうはまってんだよね」と話しているように、農作業を通して「T女子高の高校生である」というアイデンティティを獲得し始めていると考えられる。

## (2) 上級生との関係

T女子高は3年生が学校行事においても活躍し、活動を盛り上げている。例えば文化祭は前日の準備の段階から上級生が一切を仕切り全校合同HRも任されている。そのため後夜祭での3年生の達成感は大きく盛り上がる。【後夜祭は全員にジュースが配られ「乾杯」で始まる。乾杯のあとは各部門賞の発表が行われ表彰があり、最後には実行委員長が挨拶をする。3年生にとっては最後の文化祭ということもあり、大きな歓声がわきあがる。1年生はまだT女子高の構成員にはなりきれていないために、盛り上がる3年生に圧倒されてしまうが、圧倒されながらもアミは「こういうの見てると、私も来年やろうかなあって思う」と憧れを抱く】

3年生の姿を目の当たりにする機会が多いことで1年生は憧れを抱き学校行事にかかわろうとするようになる。このように3年生の姿は1年生にとっては「自分も3年生になったらあんなふうになれるのだろうか」というイメージがわく点で重要であり、構成員としてのアイデンティティ形成に大きな影響を与えている。

## (3) クラス集団の仲間関係と学習や活動へのかかわり方の相互作用

p.8では2学期以降のクラス集団において、「いい人」であるミカや「文化祭の代表として頑張っている」リエなどを中心にグループを超えた関係が形成されてきている様子を明ら

かにした。一方でリエがクラスの取り組みや授業をさぼるようになりはじめると、クラスメートはリエについて「最近、話ができなくなったよね」と話すようになる。これらは、「みんなで取り組むこと」を重視するT女子高の論理をあらわしている。この変化は行事への取り組みに積極的にかかわることでグループを超えた関係を形成できるようになり、逆にそのような関係が形成されることによって学校の活動に積極的にかかわれるようになったことをしめすものである。一方リエやその仲間たちは授業をサボるなど学校の活動にかかわらなくなることでクラスの仲間から「話ができなくなった」といわれクラス集団における仲間関係が形成できなくなり、逆に仲間関係が希薄になったために学校の活動にかかわらなくなったのである。つまりクラス集団の形成と学校の活動への取り組みは相互作用の関係にあるといえよう。

## 6、今後の課題として

このようにT女子高を一つの実践共同体としてとらえることで、1年生が入学当初は3年生やT女子高の学校生活に戸惑い違和感を感じていたものが、しだいに「T女っこ」としてのアイデンティティを形成していくプロセスを一定説明することができる。しかし説明できない要素もあった。例えば教師との関係である。レイブらの枠組みを援用するならば教師は<親方>と位置付けることができる。学習活動は農作業の事例でみたように教師との関係ではなく仲間や実際の作業そのものとの相互交渉で成立している。しかし教師自身も農作業に関しては素人であり、教師も生徒とともに学ぶということが意識され、教師は毎年様々な分野を担当するような工夫がされている。そのため時には教師は生徒と同様に学ぶ立場で学習に参加する場合もあり、このことは教師と生徒の関係形成において重要な意味を持っていると考えられる。また3年生の爪事件にみられるように教師はときとして生徒と激しく対立する立場におかれることもあり、また生徒は教師との対立関係が生じることによってクラス集団が一致団結するケー

スもあり、ある意味ではまさに教師との関係によってクラス集団が形成され、そのことがT女子高という共同体を形成している。

もう一つは生徒同士の横の関係、つまり1年生のクラス集団内での人間関係のありようと「T女っこ」誕生の関係についてである。1年生のクラス集団内のみならず、T女子高のもつ固有の論理とは別の論理によって関係が形成されている。生徒は様々な学校から入学してきており、学校外での仲間関係の広がりや活動の仕方も大きく異なっている。T女子高の文化にすぐになじめる者もいればそうでない者もいる。それらの間でクラスにおけるポジション争いが起こりながら関係が作られ、その過程でT女子高固有の文化に出会い、関係がいくども作り変えられながら構成員としてのアイデンティティが形成されていく点にも着目する必要があるだろう。

#### 註

- 1) 参与観察・インタビューの手法に関しては、佐藤郁哉『フィールドワーク』（新曜社、1992年）

を参考にした。インタビューは3年生についてはテープレコーダーをまわしながらのフォーマルな形で、1年生については録音はせず、すべてインフォーマルな形で行った。なお本稿に登場する人名はすべて仮名である。

- 2) ジーン・レイブ／エティエンヌ・ウェンガー『状況に埋め込まれた学習』産業図書
- 3) 「総合」の時間の実践についての詳細は以下の文献を参照。松村順子『「総合」科における〈生命と性〉の教育』（『教育』1996年11月号）国土社。山口直之「橘学苑『総合』における『評価』について」（『高校生活指導』119）明治図書刊、1994年。高部訓武「学校観を変えたカリキュラム」（『高校生活指導』111）明治図書刊、1992年など。
- 4) T女子高の学校名をもじった「T女っこ」という言葉が生徒の間で使われている。
- 5) 7月に「総合」の授業の一貫として3泊4日のキャンプが行われる。すべての日程は班行動でテント生活である。父母の参加もある。
- 6) T女子高の養護教諭はこのように健康面以外においても、例えば生徒同士の仲間関係についても生徒を観察しており、各担任教師と頻りに情報交換をしている。